

## 伊勢物語・二条后章段の諸相

大井田 晴彦

### はじめに

在原業平とおぼしい主人公と、二条后藤原高子の悲恋を語る一連の章段は、いわゆる齋宮章段と対をなしつつ、『伊勢物語』の一方の軸を形成している。密かに情を交わした男女が、撰閲家の思惑、政治の論理に引き裂かれるという話柄は、いかにも平安朝的でもある。

ところで、今日、一般的に二条后章段と呼び慣わしているこの物語は、具体的には、どの章段を指すのであろうか。この判定は、固有名詞をなるべく消去しようとする『勢語』にあつてかなりの困難を伴うが、次のように大別できよう。

- (ア) 本文（いわゆる後人注を含む）に二条后の名が明示されている章段。あるいは、文脈から「女」が二条后を指していることが明らかな章段。
- (イ) 「女」の臚化が著しいが、二条后を彷彿させるような語り口がなされている章段。
- (ウ) 二条后とおぼしい人物は作中に必ずしも登場しないが、

伊勢物語・二条后章段の諸相（大井田）

その成立の背景に、二条后が関与していると想定される章段。

具体的にどの章段が該当するのか、私見を示すと、以下のようなになる。なお、やや少なめに見積もつてある。

- (ア) 三、四、五、六、二六、二九、六五、七六、九五段
- (イ) 一九、三一、六四、七三、八九、九三、一〇〇、一一一段
- (ウ) 一〇六段

(ウ) に関してはいささか説明を要しよう。とりわけ有名な「ちはやぶる神代も知らず龍田川からくれなゐに水くくるとは」の段である。地の文は「昔、男、親王たちの逍遙したまふ所にまうでて、龍田川のほとりにて」とあり、二条后とは関係がない。しかし、『古今集』（秋下・二九四）の詞書には、「二条后の春宮の御息所と申しける時に、御屏風に龍田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題にて詠める」とあり、素性とともに二条后に献じた屏風歌であつたことが知られるのである。六七、六八段なども男たちが逍遙を楽しむ章段であるが、想像を逞しくすれば、元来は屏風歌であつたかもしれない。明徴はないけれども、物語中には、

同様の背景を持つ歌がまだ隠されている可能性がある。

このように、二条后章段と称しうる段は多く、また性格も一様ではない。本稿ではさまざまな広がりを見せる二条后章段について考察を進めてゆく。

# 一

既に角田文衛氏<sup>(1)</sup>や目崎徳衛氏<sup>(2)</sup>の詳細な論考が備わるものの、高子の伝記については、その醜聞とも関わる資料の制約もあり、不明な点が多い。時の権力によって真実は葬り去られたとおぼしい。『勢語』に語られる業平との恋愛は、虚構の可能性が高いというのが、今日のはぼ共通した理解であろう。貞観八年(八六八)、二五歳でのかかなり遅い入内は、良房の後宮政策にとって、当初は軽視されていた事実を伝えるに過ぎない。すなわち多美子(良相女)への対抗馬として担ぎ出されたのであり、業平との恋愛事件の影響とは考えにくい。もちろん、二人の艶聞に全く根拠がないわけではなく、それなりの下地があった。前述したように、高子は、業平をはじめ、素性・文屋康秀・藤原敏行らの優れた歌人を自らのサロンに招いた、いわばパトロンであった(古今集・春上・八、同・秋下・二九三〜四、同・物名・四四五、後撰集・春上・一)。彼女自身、「雪のうちに春は来にけり鶯のこほれる涙今やとくらむ」(古今集・春上・四)の名歌を残してもい

る。「鶯のこほれる涙」とは、他に類を見ない斬新な句であり、鋭い詩人的感性がうかがえよう。当時において、二条后のサロンは、古今集への道を大きく切り拓いた、文化の最先端の場であったと推測されるのである。しかしながら、このサロンにはいささか特異な面も見られる。後藤祥子氏は次のようにいう「高子以前には(中略)后妃自身が天皇や後見者をさしおいて、或いはそれらの不在の場所で、侍臣を召し出して歌を詠ませるというような、主体的な行為は見るできない。(中略)高子はこうした場面で、あたかも文徳朝後宮で文徳帝が典侍たちに即詠を求めたと同じやり方で、女だてらに廷臣に歌を詠ませたのだということになる」<sup>(3)</sup>。叔父良房や兄基経ら藤氏の男たちとの確執がいつから始まったかは定かではないけれども、こうした文化的な営みが先鋭化するにつれて、対立もまた深刻となっていたことは容易に想像がつく。

そして重要なのは、このサロンが『伊勢物語』を生み、育んだ場の一つではないかと想像されることである。業平と高子が自らを恋の悲劇の主人公になぞらえた歌語りが、二条后章段の初期的なものではなかったか。この見解は、物語の誕生の場に源融の河原院を想定する説<sup>(4)</sup>とも抵触しない。業平を中心に、彼の出入りする複数の場と作者によって物語が生成したと考えられるのである。ともあれ、かかる不穏な歌語りが皇妃の周辺で行われていたとすれば、それは時の権力にとって、目障りこの上ないもので

あったはずである。やや常軌を逸した奔放性、反権力的な抵抗の姿勢、それはあくまで虚構の世界での情事であっても、排除されねばならぬものであった。権力の圧迫に抗して、歌語りはさらに熱を帯びた過激なものとなってゆく——そうした緊張関係が一連の物語を生み出していったのだろう。まさに「いちはやきみやび」と称されるにふさわしい。

## 二

具体的な章段の分析を始めよう。まず、(ア)のグループに属する段、すなわち二条后と明示されている、ないしは文脈から二条后と容易に了解できる段である。

昔、男ありけり。懸想じける女のもとに、ひじき藻といふものをやるとて、

思ひあらば葎の宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも

二条后の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人におはします時のことなり。(三段 以下、引用は新編日本古典文学全集により、適宜表記を改める。)

配列上、最初に位置する章段であり、まだ高子が「ただ人」の時の出来事であったという。この歌は、「ひじきもの(引敷物)」に「ひじき藻」を読み込んだ物名歌であるが、特に眼目となるのは

伊勢物語・二条后章段の諸相(大井田)

「葎の宿」の歌語である。周知のように、この語は「玉の台」との対比で詠まれる。金殿楼閣での暮らしも、陋屋での恋しい人と一緒にいられる幸せには及ばない、というのが共通する詠み方であり、この歌もかかる発想によっている。愛し合う二人にとって満ち足りた時間であったろうが、それも長くは続かない。やがて高子は「玉の台」の人となる。

昔、東の五条に、大后宮おはしましける西の対に、住む人ありけり。それを、本意にはあらで、心ざし深かりける人、行きとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。あり所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。またの年の正月に、梅の花盛りに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、居て見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷きに、月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひ出でて詠める、

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にしてと詠みて、夜のほのほのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

(四段)

もとより「本意」ではない恋ではあったが、二人は次第に想いを深めていく。しかし、「正月の十日ばかり」に女は姿を隠してしまった。「人の通ふべき所にもあらざりければ」とは、入内を婉曲的にいう。翌年の正月に、懐かしい五条の邸を訪れてはみるも

の、あまりに変わり果てて見える光景に、男は呆然として「月やあらぬ」と絶唱せざるを得ないのだった。『古今集』恋五の巻頭を飾るこの名歌は、「心あまりて詞足らず」（仮名序）と評される業平歌の特徴を端的に示す。「月やあらぬ」は「月や昔の月ならぬ」とあるべきところで、破格の表現。「やゝぬ」の打ち消し対句も業平の得意とする技法である。「春」や「身」の同一語句の繰り返しを厭わぬのも大胆な詠みぶりといえよう。「我が身一つ」とさながら無機的な物体のごとく自身を詠んでいるのも注意される。高子を失って抜け殻となつてしまった自分を、衝撃に打ちのめされつつも、傍観的に見つめる冷徹なまなざしが認められる。

続く五段も、四段と同じく、『古今集』の業平真作の和歌を核とする章段である。

昔、男ありけり。東の五条わたりに、いと忍びて行きけり。みそかなる所なれば、門よりもえ入らで、童べの踏みあけたる築地のくづれより通ひけり。人しげくもあらねど、たび重なりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に夜ごとに人を据ゑてまもらせければ、行けども、え会はずで帰りけり。さて、詠める、

人知れぬ我が通ひ路の関守は宵々ごとにうちも寝なむと詠めりければ、いといたう心やみけり。あるじ許してけり。二条の後に忍びて参りけるを、世の聞こえありければ、

兄人たちのまもらせたまひけるとぞ。

人目を忍ぶ逢瀬も、繰り返されるうちに、知られる所となり、兄たちが監視につくようになったのだという。その厳重な壁に阻まれ、なす術もなく帰る男が詠んだのが「人知れぬ」の歌である。「高子ハ」といいたう心やみけり」「あるじ許してけり」と人の心を強く揺さぶる、男の歌の威力を語るのが、この段の眼目であろう。しかし、次の六段になると、また二人の恋は許されぬものとして語られる。「女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて」芥川まで辿り着くも、鬼に一口に食われてしまう。後半の叙述によれば、実は兄の基経・国経によつて連れ戻された、と語り直されてもいる。権力に立ち向かい、逃避行を敢行するも、結局は敗北せざるを得ない男の無力感と、高子を奪われた喪失感が強く漂う章段である。七段から、いわゆる東下りの章段が続くが、恋の挫折が、その契機であるかのような配列となつているのは明らかである。高子を失った男は「白玉か何ぞと人の問ひし時つゆと答へて消えなましものを」と詠んだ。はかなく消えた高子は、まさに白玉・露であつた。これは『新撰和歌』恋雑に収めるものだが、本来、次の古今集歌（雑上・八七三）と贈答をなしていたと推測される<sup>6</sup>。

五節の明日にかむぎしの玉の落ちたりけるを見て、誰がならむととぶらひて詠める

主やたれ問へど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思

河原左大臣

## はむ

詞書にあるように、五節を背景として詠まれた歌である。高子は、貞観元年（八五九）に五節の舞姫に選ばれたことが知られる。そうした高子にふさわしく、「白玉かゝ」の歌が六段に引用されたと考えるのは穿ちすぎだろうか。なお、『古今集』に載せる融の歌はもう一首、「陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れむと思ふ我ならなくに」（恋四・七二四）があるが、これが初段に引かれていることは周知の通りである。かように所要所に融の歌が響いているのであり、やはり物語における融の関与を認めたいのである。

これら四つの章段には共通する特徴がみられる。まず、いずれも若き日の二人の恋の挫折を、パセティックに語っていることが挙げられる。また、どの段も男の歌のみが語られ、女が返歌したとは語られていない点も注意される。五段では男の歌に強く感動した、とあるが歌を詠むには至らない。六段では「かれは何ぞ」と訊ねてはいるものの、やはり歌は詠まれない。高子の歌は、物語全体を見渡してみても、六五段に「あまの刈る藻にすむ虫のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」「さりともと思ふらむこそかなしけれあるにもあらぬ身を知らずして」の二首がある程度で、これも「蔵にこもりて」詠んだ独詠歌で、男と贈答したわけではない。このように、物語はあえて二人の贈答歌を排していると察せられる。互いに共感を抱きつつも、贈答を描かないこと

伊勢物語・二条后章段の諸相（大井田）

で、二人の仲を遮る障害の大きさを語ろうとするのである。それだけに、男の歌が、いつそう悲痛に響き渡ることにもなる。さらに、「葎の宿」（三段）「あばらなる板敷き」（四段）「築地の崩れ」（五段）「あばらなる蔵」（六段）と、荒廃したさまが各段に語られているのも特徴的である。これを実景と見る必要は全くない。すっかり打ちひしがれた男の心のかたち、荒涼とした心象風景と見るべきである。

## 三

高子入内前の、若き日の恋を語る、冒頭部の四章段について見てきた。入内後の出来事を語る章段を、次に取り上げよう。

昔、二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうでたまひけるに、近衛府にさぶらひける翁、人々の禄たまはるついでに、御車よりたまはりて、詠みて奉りける、

大原や小塩の山も今日こそは神代のことも思ひ出づらめ

とて、心にもかなしと思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし。

（七六段）

『古今集』雑上（八七二）に、業平自身の作として載せる。詞書は「二条後のまだ春宮の御息所と申しける時に、大原野に詣でたまひける日、詠める」とあって簡潔である。藤氏の人々が挙って大原野神社に参詣した、その折の詠である。この段では、晴れの

場にふさわしく、男は「翁」と呼ばれ、寿きの歌を献ずるのである。「大原や」の歌の眼目は、「神代のこと」にある。藤氏の祖、天児屋根命が邇邇芸命に随った天孫降臨の故事を踏まえ、一族のさらなる繁栄を祈念するこの歌は、祝意に満ちた申し分のない出来映えである。しかしながら、それはあくまで表面的な、儀礼の言葉に過ぎない。満座の人々には理解不能な、翁と後の間でしか通じない意味が「神代のこと（甘美で切なかつた昔の思い出）」に込められている。盛儀の喧噪をよそに、二人だけが密かに心を通わせている、その恋の符牒が「神代のこと」なのであった。なお、この話は、『大和物語』一六一段に、より詳細な地の文をもって載せるが、『勢語』三段にあたる「ひじき藻」の話と合わせて一章段をなしている点に注意される。入内前後の二つの話を繋げることで、『大和』はコントラストを強調しようとしたのである。

昔、春宮の女御の御方の花の賀に召し預けられたりけるに、

花にあかぬ嘆きはいつもせしかども今日の今宵に似る時はなし  
(二九段)

この段の歌は『古今集』および両『業平集』に見えず、ようやく『新古今集』に収められる。業平真作とは見なしがたいが、段の基調は、七六段によく似ている。やはり「花の賀」という晴れの場であり、かかる折であるからこそ、男は後に堂々と接近できる

のである。花を見続けたいたいという嘆きは毎年繰り返してきたが、とりわけ花の美しい今日の今宵ほど、そんな思いを抱かされる時はない、というのが歌意である。美しく咲き誇る「花」とは、高子を譬えていよう。そして、「花」といえば、その記憶は四段へと遡る。やはりこの段でも、人々の想いは過去への感傷と向かってゆくのである。

次に取り上げるのは、二条後の名は見えないものの、注目すべき段である。

昔、男、人の前栽に菊植ゑけるに、

植ゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯

れめや

(五一一段)

『古今集』秋下(二六八)に業平作として載せる。詞書は「人の前栽に、菊に結びつけて植ゑける歌」とあり、『勢語』とほぼ同文である。歌を贈った相手も漠然とした「人」となっている。この話は、『大和物語』一六三段にも見え、そこでは「在中将に、後の宮より菊を召しければ、奉りけるついでに」とあり、高子に贈った歌としている。本来、漠然とした「人」に、『大和物語』の関心と独自の解釈によつて高子の名を充てたと見られぬこともないが、実際に高子とのやりとりで詠まれた歌とする可能性も拭しきれない。高子に贈った歌と仮定すると、その解釈には含みが生じてこよう。すなわち、下の句は、実際にお会いすることは叶わなくなりましたが、心の中では今もなお、お慕い申しており



ます、といった意を込めたものとなる。二九・七六段と同傾向の段といえよう。「咲かざらむ」「散らめ」「枯れめや」と、慶祝にぞぐわぬ語を大胆に用いているあたり、業平らしさが発揮された歌でもある。

これらの例に見るように、『大和物語』には、業平（在中将）が登場し、『勢語』とはほぼ共通する話題を扱った章段群（一六〇～一六六段）が存在する。『大和』一六一一段は『勢語』三段と七六段、一六二段は『勢語』一〇〇段、一六三段は『勢語』五一一段、一六四段は『勢語』五二段、一六五段後半は『勢語』一二五段、一六六段は『勢語』九九段とそれぞれ対応する。両物語と『業平集』などの先後関係は、各段において事情が異なると考えられるので立ち入らないが、『大和』における在中将章段には、顕著な偏りが見て取れる。すなわち、東下りや斎宮に関する話題は見られず、二条後の物語が中核をなしているのである。高子以外（<sup>⑦</sup>）の恋の相手も、染殿の内侍（一六〇段）、弁の御息所（一六五段）といった女性が登場しており、『大和』の宮廷文学的性格を如実に示すものといえよう。

#### 四

次に、（イ）群に属する章段、すなわち二条後の名こそ出ないが、その人を連想させ、彷彿させる章段を見ていきたい。先にも

伊勢物語・二条后章段の諸相（大井田）

述べたように、これらの章段の判定はかなり困難である。「男」「女」に、具体的な人名を充てる理解は、『和歌知顕集』などの古註に見られる方法だが、恣意的に過ぎ、牽強附会の説も少なくない。章段の認定はなるべく禁欲的であるべきだろう。

昔、「そこにはあり」と聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女のあたりを思ひける、

目には見て手には取られぬ月のうちの桂のごとき君にぞありける（七三段）

昔、いやしからぬ男、我よりはまさりたる人を思ひかけて、年経ける、

人知れず我恋ひ死なばあぢきなくいづれの神になき名おほせむ（八九段）

昔、男、身はいやしくて、いとなき人を思ひかけたり。少し頼みぬべきさまにやありけむ、臥して思ひ、起きて思ひ、思ひわびて詠める、

あふなあふな思ひはすべしなぞへなく高きいやしき苦しかりけり

昔も、かかることは、世のことわりにやありけむ。（九三段）七三段の前後には伊勢斎宮章段が連続していることから、ここでの「女」は、斎宮と理解するほうが自然かもしれない。が、詞書は四段の「あり所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ」を想起させるものがある。「目には見てゝ」の歌は万葉歌

(巻四・六三三・湯原王、第五句「妹をいかにせむ」、古今六帖・第六では「妹にもあるかな」の転用だが、「月」のイメージはやはり四段の高子に通ずる。八九段は、皇胤たる「いやしからぬ男」業平より「まさりたる人」とあるから、やはり高子を想起させる。身分違いの恋に悩みつづ自分が死んだならば、世の人々は、いったいどの神のたたりと噂するだろうか、というのが歌意である。この段は、『源氏物語』柏木巻の次の場面に投影しているとおほしい。まさに高嶺の花である女三宮と通じてしまったがゆえに、今や柏木は身を滅ぼそうとしている。

(致仕の大臣)「まことにこの物の怪あらはるべう念じたまへ」など、こまやかに語らひたまふもいとあはれなり。(柏木)「かれ聞きたまへ。何の罪とも思しよらぬに。占ひよりけむ女の霊こそ、まことにさる御執の身にそひたるならば、いとほしき身をひきかへ、やむごとなくこそなりぬべけれ。さてもおほけなき心ありて、さるまじき過ちを引き出でて、人の御名をも立て、身をもかへりみぬたぐひ、昔の世にもなくやほありけると思ひなほすに(中略)まどひそめにし魂の、身にも還らずなりにしを、かの院のうちにあくがれ歩かば、結びとどめたまへよ。」

(新編日本古典文学全集④二九四―五頁)

『河海抄』などは、「過ちを引き出でて」以下の典拠に、六五段の、業平と高子の一件を挙げている。さらに、「まどひそめにし

」が「思ひあまり出でにし魂のあるならむ夜深く見えは魂結びせよ」(二一〇段)によっていることは明らかである。そして、これらに先立つ「何の罪とも」が、実は八九段の「人知れず」の和歌を踏まえているのである。『伊勢物語』引用が集中的になされている場面といえよう。

七三・八九段に見られた二人の身分差が、さらに拡がったのが、九三段である。歌意は、身分相応に恋はすべきだ、比べようもなく高貴な者と卑しい者の恋は苦しいものだった、というもの。この歌は、『古今六帖』および両『業平集』に見られるもので、業平実作とは断じかねるが、「あふなあふな」「なぞへなく」という耳慣れない奇抜な語法や「高きいやしき」の対句の用法など、業平的な要素を充分に有している。

ところで、二条后章段を考える際、業平の恋の相手は、高子に限らない。例えば、次の段を見られたい。

昔、二条の后に仕うまつる男ありけり。女の仕うまつるを、つねに見かはして、呼ばひわたりけり。「いかで、物越に対面して、おほつかなく思ひつめたること、少しはるかさむ」と言ひければ、女、いと忍びて、物越に逢ひにけり。物語などして、男、

彦星に恋はまさりぬ天の河へだつる関をいまはやめてよ  
この歌にめでて、逢ひにけり。

(九五段)

昔、男、宮仕へしける女の方に、御達なりける人をあひ知



りたりける。ほどもなくかれにけり。同じ所なれば、女の見には見ゆる物から、男は、ある物かとも思ひたらず、女、あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆる物から

と詠めりければ、男、返し、

あま雲のよそにのみしてふることはわがある山の風はやみなり

と詠めりけるは、また、男ある人となむ言ひける。(一九段) 九五段では、業平は、「二条の后に仕うまつる男」であり、その恋の相手は、同じく高子に仕える女房という設定である。一九段も類似の章段で、高子のような貴人に仕える女房と男の交渉を語る。この贈答は、『古今集』(恋一五・七八四・五)の詞書に「業平の朝臣、紀有常が娘に通ひけるを、恨むることありて、しばしの間、昼は来て夜さは帰りのみしければ、詠みておくりける」とあり、本来は有常の娘とのものだったと知られる。それを、ことさらに宮仕えの際の出来事として仕立て直したのである。『伊勢物語』には、他にも〈宮仕え章段〉とでも称すべき段がいくつもあり、宮中でのみやびな出会いが語られている。いったい、この物語における宮仕えとは、気乗りのしない(八六段)ものであり、親しい人との仲を引き裂く(八四・八五段)ものとして否定的に語られがちであるが、その反面、かかる章段も少なくない。〈宮仕え章段〉の成立は、先に見た七三・八九・九三段などの存

伊勢物語・二条后章段の諸相(大井田)

在から説明できよう。すなわち、業平と高子の身分の懸隔が強く意識されるところから、后に仕える男女の恋の物語へと展開してゆくのである。同様の傾向は、斎宮章段にも見られる。「斎の宮のわらはべ」(七〇段)、「かの宮に、すぎこと言ひける女」(七一)段のように、六九段から派生した段では、斎宮に仕える女が恋の相手となっている。二条后・斎宮のみならず、その女房たちにも恋を仕掛ける点に、色好みとしての業平像が鮮明になってゆくのだろう。特に、一一一段などは「男、やむことなき女のもとに、なくなりけるをとぶらふやうにて、いひやりける」などであり、男の色好みぶりが躍如としていよう。一途で情熱的な恋のみならず、趣味的・遊戯的な恋愛にまで、物語はその裾野を広げてゆくのである。

## 五

六五段は、『伊勢物語』中、最も長大な章段である。一連の二条後の物語を、一段に集約したかのような感があるが、他の段と趣を異にする、独自の点も少なくない。

昔、おほやけ思して、仕うたまふ女の、色許されたるありけり。大御息所とていますかりけるとこなりけり。殿上にさぶらひける在原なりける男の、まだいと若かりけるを、この女、あひ知りたりけり。男、女がた許されたりければ、女

のある所に来て、向かひをりければ、女、「いとかたはなり。身も滅びなむ。かくなせそ」と言ひければ、

思ふにはしのぶることぞ負けにけるあふにしかへばさもあらばあれ

と言ひて、曹司に降りたまへれば、例の、この御曹司には、人の見るをも知らで、昇りあければ、この女、思ひわびて、里へ行く。されば、「何の、よきこと」と思ひて、行き通ひければ、皆人聞きて笑ひけり。つとめて、主殿司の見るに、杳は取りて、奥に投げ入れて昇りぬ。

かく、かたはにしつつありわたるに、身もいたづらになりぬべければ、「つひに滅びぬべし」とて、この男、「いかにせむ。わがかかる心やめたまへ」と、仏神にも申しけれど、いやまさりにのみおぼえつつ、なほ、わりなく恋しうのみおぼえければ、陰陽師、巫よびて、恋せじといふ祓への具してなむ行きける。祓へけるままに、いとどかなしきこと数まさりて、ありしより、けに恋しくのみおぼえければ、

恋せじと御手洗河にせし禊ぎ神はうけずもなりにけるかなと言ひてなむにける。

この帝は、顔かたちよくおはしまして、仏の御名を、御心に入れて、御声はいと尊くて申したまふを聞きて、女は、いたう泣きけり。「かかる君に仕うまつらで、宿世つたなくかなしきこと、この男にほだされて」とてなむ、泣きける。か

かるほどに、帝聞こし召しつけて、この男をば、流しつかはしてければ、この女のいとこの御息所、女をばまかでさせ、蔵に籠めて、しをりたまうければ、蔵に籠もりて泣く。

海人の刈る藻に棲む虫のわれからと音をこそ泣かめ世をばうらみじ

と、泣きをれば、この男、人の国より、夜ごとに來つつ、笛をいと面白く吹きて、声はをかしうてぞあはれに歌ひける。

かかれば、この女は、蔵に籠もりながら、それにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

さりともと思ふらむこそかなしけれあるにもあらぬ身を知らずして

と思ひをり。男は、女しあはねば、かくし歩きつつ、人の国に歩きて、かく歌ふ、

いたづらに行きては來ぬるものゆゑに見まほしさにいざなはれつつ

水の尾の御時なるべし。大御息所も染殿の後なり。五条の后とも。

「思ふには」「恋せじと」「いたづらに」の三首はいずれも『古今集』詠み人知らずの歌(恋一・五〇三、同・五〇一、恋三・六二〇)であり、「海人の刈る」は『古今集』恋五(八〇七)の典侍藤原直子の歌。業平実作歌は含まれず、後に増補された章段と思われる。三―六段に見られた、入内前の二人の交渉が

一切語られない点にまずは気づかされる。高子が入内して後、「女がた許され」ていたので、恋が始まったという設定である。結果として、四段のごとき悲劇的かつ激越な色調が弱められてしまった感は否めまい。六五段では、高子入内による喪失感よりも、后妃となった高子との、身を滅ぼしかねない禁忌の恋に関心があるようである。さらに、男を后より年少として語っている点も注意されよう（実際は業平が一七歳年長）。一九歳年少の惟喬親王を「童より仕うまつる君」（八五段）と語るのと同様の手法である。ことさらに史実を改変し、若さゆえの未熟さを強調すること、無分別な求愛の振る舞いにそれなりの必然性を与えようとする意図がある。

後半部では、ついに二人の仲は帝の知るところとなり、男は流罪、女は蔵に監禁される。これらの叙述は、六段の「蔵」および七段以降の東下りを想起させつつ、変奏しているとおぼしい。人の国から毎晩訪れては逢えぬまま空しく帰る、というのは四段を連想させる。

さて、自分でも扱いかねる男の情動を描くのみならず、女の側の心理も存分に描き込まれている点がこの段の特徴である。周囲の眼も顧みず求愛する男に当惑し、帝の寵愛を忝く思う一方、男にも惹かれ、自らの数奇な運命を嘆く、かように高子の内面に踏み込んだ描写がなされるのは、この段が唯一である。珍しく二首の歌を詠んでいるが、それが男との贈答をなさぬ独詠となってい

ることも注意される。さまざまな障碍に阻まれ、二人は交流しあうことができない。しばしば男性本位と評される『伊勢物語』だが、「女の物語」としての側面を、この段は有しているのである。二条后物語の帰結がここに認められるのではなからうか。かかる后妃像が、『源氏物語』の朧月夜へと受け継がれていく<sup>⑨</sup>のに、さほどの時間は要しない。

## むすび

『古今集』前夜の和歌の振興を推進した点で、また、『伊勢物語』という歌物語の傑作を生み出した点で、二条后高子の果たした役割は、まことに大きいものがある。しかし、それは後宮での彼女の立場を危ういものにした。物語に語られる「みやび」の恋は、藤氏の男たちとの、熾烈で絶望的な争いの中で育まれていったとおぼしい。この物語を一貫する、反体制的な性格は、かかる成立の場からも説明できよう。

それにしても高子の人生、とりわけ晩年は悲惨である。子の陽成の若すぎる退位、僧善祐との醜聞、皇太后位の剥奪と、不遇のうち世を去った。その実人生は、物語よりもむしろ数奇なものであった。ようやく復位が認められるのは、天慶六年（九四三）、没後三十三年を経てのことである。『伊勢物語』に一人の女の涙を見る。

## 注

- (1) 角田文衛『二条の後 藤原高子』(二〇〇三年、幻戯書房、初出一九六八)
- (2) 目崎徳衛『在原業平の歌人的形成』『平安文化史論』(一九六八年、桜楓社)
- (3) 後藤祥子『二条后物語の成立』(『日本文学』一九九一年五月)
- (4) 吉山裕樹『原型伊勢物語考』(『国語と国文学』一九七八年六月)
- (5) 渡辺実『源融と源氏物語』(『国語と国文学』一九七二年十一月)、同『新潮日本古典集成 伊勢物語』(一九七六年、新潮社) 解説
- (6) 高崎正秀『物語文学序説』(一九四二年、青磁社)
- (7) 吉山裕樹『大和物語における在中将・二条后説話と伊勢物語』(『広島大学文学部紀要』一九七九年十二月)
- (8) 『和歌知願集』では、四五・九六段の「女」をも高子としている。この問題については、上村希『伊勢物語』二条后章段について―第四十五段・第九十六段をめぐって―(『國學院大學大学院文学研究科論集』一九九九年三月) 参照。
- (9) 増田繁夫『朧月夜と二条后』(『人文研究』一九八〇年三月) に詳しい。

**Abstract***Nijono-kisaki of Isemonogatari*

Haruhiko Oida

Chapters of *Nijono-kisaki* (the Consort of the Second Ward) depict tragic love of *Ariwara-no-Narihira* and *Fujiwara-no-Takaiko*. Nowadays, it is thought that the love story was a fiction. Probably some stories of *Isemonogatari* (the tales of Ise) were made and presented in her salon.

Her avant-garde cultural activities let the opposition with *Yoshifusa* and *Mototsune* (her uncle and brother) intensify. As much as the chapters were extended, the contents of those became various. In some chapters, her name is specified, and, in others, it is suggested. In some chapters, *Narihira* gives earnest love to *Takaiko*, and, in others, he is in love with her maid.

The sixty-fifth chapter is the longest in *Isemonogatari*. In this chapter, the psychology of woman is described in detail. Her real life was still more miserable than it in the fiction.